

おとずれ

国木田独歩

青空文庫

五月二日付の一通、同十日付一通、同二十五日付の一通、以上三通にてわれすでに厭き足りぬと思いたもうや。もはやかかる手紙願わくは送りたまわざれとの御意、確かに承りぬ。されど今は貴嬢きみがわれにかく願いたもう時は過ぎ去りてわれ貴嬢きみに願うの時となりしをいかにせん。昨年の春より今年の春まで一年と三月の間、われは貴嬢きみが乞わるるままにわが友宮本二郎ひぐみほんじろうが上じょうを誌せし手紙十二通じゅうにつうを送りたり、十二通に對する君が十五通の札状さつじょうを数えても一年と三月が間の貴嬢きみがよろこびのほどは知らる。今十二通の裏にみなぎる春の楽しみを変えて三通を貫く苦き消息おとづれとなしたもうは貴嬢きみならずや。貴嬢きみがいかに深き事情ありと弁いいひら解わかわきたもうとも、かいなし、宮本二郎ひぐみほんじろうが沈みゆく今のありきまに何の関りあらん。かの三通はげに貴嬢きみが読むを好みたまわぬも理ぞかし、これを認めしわれ、心乱れて手もふるいければ。されどわれすでにこの三通にて厭あき足りぬと思いたまわば誤りなり。今はわれ貴嬢きみに願うべき時となりぬ。貴嬢きみはわが願いを入れ、忍びて事の成り行きを見ざるべからず、しかも貴嬢きみ、事の落着は遠くもあるまじ、次を見候え。
——手荒く窓を

開きぬ。地平線上は灰色の雲重なりて夕闇をこめたり。そよ吹く風に霧雨舞い込みてわが面を払えば何となく秋の心地せらる、ただ萌え出する青葉のみは季節を欺き得ず、げに夏の初め、この年の春はこの長雨にて永久に逝きたり。宮本二郎は言うまでもなく、貴嬢もわれもこの悲しき、あさましき春の永久にゆきてまたかえり来たらぬを願うぞうたてき。

わが心は鉛のごとく重く、暮れゆく空の雲をながめ入りてしばしは夢心地せり。われには少しもこの夜の送別会に加わらん心あらず、深き事情も知らでただ壯なる言葉放ち酒飲みかわして、宮本君がこの行を送ると叫ぶも何かせん。

げに春ちよう春は永久に逝きぬ。宮本二郎は永久を契りし貴嬢千葉富子に負かれ、われは十年の友宮本二郎と海陸、幾久しく別れてまたいつあうべきやを知らず、かくてこの二人が樂しき春は永久にゆきたり。わが心は鉛のごとく重く、暮れゆく空は墓のごとし。この階下の大時計六時を湿やかに打ち、泥を噛む轍の音重々しく聞こえつ、車来たりぬ、起つともなく起ち、外套を肩に掛けて階下に下り、物をも言わで車上に身を投げたり。運び行かる先は五番町なる青年俱楽部なり。

俱楽部の人々は二郎が南洋航行の真意を知らず、たれ一人知らず、ただ俱楽部員の中に

てこれを知る者はわれ一人のみ、人々はみな二郎が産業と二郎が猛氣とを知るがゆえに、年若き夢想を波濤に託してしばらく悠々の月日をバナナ実る島に送ることぞと思えり、百トンの帆船は彼がための墓地たるを知らざるなり。知らぬも理ならずや、これを知る者、この世にわれとわが母上と二郎が叔母とのみ。あらず、なお一人の乙女知れり、その美しき眼はわが鈍き眼に映るよりもさらに深く二郎が氷れる胸に刻まれおれり。刻みつけしこの痕跡は深く、凍れる心は血に染みたり。ただかの美しき乙女よくこれを知るといえども、素知らぬ顔して弁解の文を二郎が友、われに送りぬ。げに偽りという鳥の巣くうべき枝ほど怪しきはあらず、美わしき花咲きてその実は塊なり。

二郎が家に立ち寄らばやと、靖国社の前にて車と別れ、庭に入りぬ。車を下りし時は霧雨やみて珍しくも西の空少しく雲ほころび蒼空の一線なお落日の余光をのこせり。この遠く幽かかる空色は夏のすでに近きを示すがごとく思われぬ。されど空気は重く湿り、茂り合う葉桜の陰を忍びにかよう風の音は秋に異ならず、木立ちの夕闇は頭うなだれて影のごとく歩む人の類を心まつさまなり。ああこのごろ、年若き男の嘆息つきてこの木立ちを当てもなく行き来せしこと幾度ぞ。

水瀬に映る雲の色は心失せし人の顔の色のごとく、これに映るわが顔は亡友の棺

を枯れ野に送る人のごとし。目をあげて心ともなく西の空をながむればかの遠き蒼空の一線は年若きわれらの心の秘密の謎語のことく、これを望みてわが心怪しゆう躍りぬ。あらん少の夢よ、かの蒼空はこの夢の國ならずや、二郎も貴嬢もこのわれもみなかの國の民なるべきか、何ぞその色の遠くして幽かに、恋うるがごとく慕うがごとくはたまどろむごとくさむるがごときや。げにこの天をまなざしうとく望みて永久の希望語らいし少女と若者とは幸いなりき。

池のかなたより二人の小娘、十四と九つばかりなるが手を組みて唄いつつ来たるにあいぬ。一目にて貧しき家の児なるを知りたり。唄うはこのごろ流行る歌と覚しく歌の意はわれに解し難し。ただ二人が唄う節の巧みなる、その声は湿りて重き空気にさびしき波紋をえがき、絶えてまた起こり、起こりてまた絶えつ、周囲に人影見えず、二人はわれを見たれど意にとめざるごとく、一足歩みては唄い、かくて東屋の前に立ちぬ。姉妹共に色蒼ざめたれど楽しげなり。五月雨も夕暮れも暮れゆく春もこの二人にはとりわけ悲しからずとりわけうれしからぬようなり、ただおのが唄う声の調べのまにまにおのが魂を漂わせつ、人の上も世の事も絶えて知らざるなり。人生まれて初めは母の唄いたもう調べに誘われて安けく眠り、その次は自ら歌いて自ら眠るこの姉妹のごときなり、人唄えばとて

自ら歌えばとてついに安き眠りを結び得ざるは貴嬢のきみごとき二郎のごときまたわれのごとき年ごろの者なるべし、ただ二郎この度は万里ばんりの波上、限りなき自然の調べに触れて、誠なき人の歌に傷つきし心を安めばやと思い立ちぬ。げに眞情まじごころ浅き少女の当座の曲にその魂を浮かべし若者ほど哀れなるはあらじ。

われしばしこの二人を見てありしに二人もまた今さらのように意づきしか歌を止め、わが顔を見上げて笑いぬ、姉なるは羞しげに妹なるはあきれしさまにて。われまたほほえてこれに応えざるを得ざりき。君はこのごろ毎夜狂犬いで年若き娘をのみ囁むちよううわさをききたまいしやど、妹はなれなれしくわれに聞えり、問い合わせの不思議なると問えるさまの唐突とうとつなるとにわれはあきれで微笑ほほえみぬ。姉はわが顔を見て笑いつ、愚かなることを言うぞと妹の耳を強く引きたり。されど片目の十歳がかく語りしものを痛きことかなと妹は眼まなをみはり口とがらせ耳をおおいて叫びぬ。たちまち姉は優しく妹の耳に口寄せて何事かささやきしが、その手をとりて引き立つれば妹はわれを見て笑みつ、さて二人は唄うこともとのごとくにしてかなたに去りぬ。

げに見すぼらしき後ろ影よもぎ、蓬なす頭、色あせし衣、われはしばしこれを見送りてたたずみぬ。この哀れなる姿をめぐりて漂う調べの身にしみし時、霧雨きりあめのなごり冷ややかに顔

をかすめし時、一陣の風木立ちを過ぎて夕闇嘯きし時、この切那せつなわれはこの姉妹はらからの行く末のいかに浅ましきやを鮮あざやかに見たる心地せり。たれかこの少女おどめらの行く末を守り導くものぞ、彼ら自ら唄いて自ら泣く時も遠くはあるまじ。

急ぎて裏門を出でぬ、貴嬢きみはここ梅林を憶えたもうや、今や貴嬢には苦しき紀念かたみなるべし、二郎には悲しき木陰となり、われには恐ろしき場処となれり。門を出ずれば角かどなる茶屋の娘軒先に立ちてさびしげに暮れゆく空をながめいしが、われを見て微かに礼なしぬ、貴嬢きみはこの娘を憶えいたもうや。賤いやしきこの娘を。

二郎はすでに家にあらざりき、叔母はわれを引き止めてまたもや数々かずかずの言葉もて貴嬢きみを恨み、この恨み永久とこしえにやまじと言ひ放ちて泣きぬ、されどいづこにかなお貴嬢きみを愛めする心ありて恨めど怒り得ぬさまの苦しげなる、見るに忍びざりき。叔母恨むというとも貴嬢きみ怒るに及ばじ、恨む心は女の心にして、恨む女は愛めする女なり、ただこの叔母を哀れとおぼさずや。

叔母のいいけるは昨夜夜ふけて二郎一束の手紙に油を注ぎ火を放ちて庭に投げいだしけるに、火は雨中に燃えていよいよ赤く、しばしは庭のすみずみを照らししばらくして次第に消えゆくをかれは静かにながめてありしが火消えて後もややしばらくは真闇まくらなる庭の面おもて

をながめいたりとぞ。火や煙や灰や闇黒や、二郎はその次に何者をか見たる。

わが車五味坂ごみざかを下れば茂み合う檉の葉陰かしのかげより光影ひかげきらめきぬ。これ俱樂部クラブの窓より漏るなり。雲の絶え間には遠き星一つ微かかすかにもれたり。受付の十蔵、卓に臂ひじを置き煙草吹かしつつ外そと面おもてをながめてありしがわが姿を見るやその片目かためをみはりて立ちぬ、その鼻よりは煙ゆるやかに出でたり。軽く礼いやして、わが渡す外套がいとうを受け取り、太くしわがれし声にて、今宮本ぬしの演説ありと言いぬ。耳をそばだつるまでもなく堂をもるるはかれの美わしき声、沈める調ちょうなり。堂の闇たつを押さんとする時何心なく振り向けば十蔵はわが外套を肩にかけ片手にランプを持ちて事務室の前に立ちこなたをながめいたり。この時われかの貧しき少女が狂犬のうわさせしといいし片目の十蔵おもてを憶おもい起こしぬ。十蔵はわが振り向きしを見て急にランプの火を小さくせり。われその故ゆゑを解し得ず、ただ見る六尺ばかりの大男の影おぼろなるが静かに事務室うちの中に消え去りしを。この十蔵が事は貴嬢きみも知りたもうまじ、かれの片目は奸なる妻よこしまが投げ付けし火箸ひばしの傷にて盲つぶれ、間もなく妻は狂犬にかまれて亡せぬ。このころよりかれが拳動ふのまいに怪しき節多くなり増さりぬ、元よりかれは世の常の人はあらざりき。今は三十五歳といえど子もなく兄弟はらからもなし。

予は闇たつを排して内に入りぬ。

三十余りの人々長方形の卓を囲みて居並びしがみな眼を二郎の方にのみ注げば、わが入り来たれるに心づきしは少なかりき。一座肅然たる中に二郎が声のみぞ響きたる。かれが蒼白き顔は電燈の光を受けていよいよ蒼白く貴嬢きみがかつて仰ぎ見て星とも愛でし眼よりは怪しき光を放てり。ただいすこともなく誇れる鷹の悌たかおもかげ眉宇の間に動き、一搏いっぽくして南の空遠く飛ばんとするかれが離別の詞を人々は耳そばだてて聴けど、暗き穴より飛び來たりし一矢深くかれが心を貫けるを知るものなし、まして暗き穴に潜める貴嬢きみが白き手をや、一座の光景ありさまわが目にはげに不思議なりき。

二郎は病やまいを養うためにまた多少の経画けいかくあるがためにと述べたり、されどその経画なるものの委細は語らざりき。人々もまたこれを怪しまざるようなり。かれが支店の南洋にあるを知れる友らはかれ自らその所有の船に乗りて南洋おもむに赴くを怪しまぬも理ならずや。ただひたすらその決行を壯さかんなりと思えるがごとし。

女の解し難きものの一をわが青年俱樂部の壁内ならでは釀かさざる一種の灑氣こうきなりといわまほし。今の時代の年若き男子一度この裡うちに入りて胸を開かばかれはその時よりして自由と人情との友なるべし。さてさらに貴嬢きみの解し難きものの一を言わんか、この灑氣を呼吸するかの二郎なり。何ゆえぞと聞いたまいそ、貴嬢きみもしよくこれを解し得る少女ならんに

はいかで暗き穴よりかの無殘なる箭を放たんや。二郎述べおわりて座につくや拍手勇ましく起こり、かれが周囲には早くも十余人のもの集まりたり。廊下に出するものあり、煙草に火を点するものあり、また二人三人は思い思ひに椅子を集め太き声にて物語り笑い興ぜり。かかる間に卓上の按排備わりて人々またその席につくや、童子が注ぎめぐる麦酒の泡いまだ消えざるを一斉に挙げて二郎が前途を祝しぬ。儀式はこれにて終わり俱楽部の血はこれより沸かんとす。この時いざこともなく遠雷のとどろくごとき音す、人々顔と顔見合わす隙もなく俄然として家振るい、童子部屋の方にて積み重ねし皿の類の床に落ちし響きすさまじく聞こえぬ。

地震ぞと叫ぶ声室の一隅より起こるや江川と呼ぶ少年真つ先に闇を排して駆けいでぬ。壁の落つる音ものすごく玉突き場の方にて起これり。ためらいし人々一斉に駆けいでたり。室内に残りしは二郎とわれと岡村のみ、岡村はわが手を堅く握りて立ち二郎は卓のかなたに静かに椅子に倚れり。この時十歳室の入り口に立ちて、君らは早く逃げたまわずやといいうその声、その拳動、その顔色、自己は少しも恐れぬようなり。この時振動の力さらに加わりてこの室の壁眼前に崩れ落つる勢いすさまじく岡村と余とは宮本宮本と呼び立てつつ戸外に駆けいでしがひとり二郎のみは室に残りぬ、われ

いかでためらうべき、二郎を連れ出さばやと再び内に入らんとするを岡村堅くわが手を握りて放たず、われら口々に宮本宮本と呼び立てぬ。この時十歳卒然独り内に入りたり。われらみな十歳二郎を救うことぞと思い、十歳早くせよと叫び、戸口をきつと見て二人の姿の飛び出^いするをまちぬ。^{かわら}瓦降り壁落つ。われらみな樺の老木^{かし}^{おいき}^{たて}を楯にしてその陰にうずくまりぬ。四辺の家々より起ころる叫び声、泣き声、遠かたに響く騒然たる物音、げにまれなる強震なり。

待てど二郎十歳ともに出で来たらず、口々に宮本宮本、十歳早く出でよと叫べども答えずらなし、人々は顔と顔と見合して愕^{おどろ}き怪しみ、わが手を握りし岡村の手は振るいぬ。

この時わが胸を衝^つきて起こりし恐ろしき想^{おも}いはとても貴嬢^{きみ}の解したまわぬ境なり、またいかでわが筆よくこれを貴嬢^{きみ}に伝え得んや。試みに想^{そうちら}い候え、十歳とは奸なる妻のために片目を失いし十歳なり、妻なく子なく兄弟なく言葉少なく気重く心怪しき十歳なり。二郎とはすなわち貴嬢^{きみ}こそよく知りたもう二郎なり。あわれこの二人は始めよりその運命を等しゆうすべきところありて黙々のうちその消^{おとずれ}息を互いに会じたるならざるか。柱鳴り瓦飛び壁落つる危急の場にのぞみて二人一室に安座せんとは。われこれを思いし時、心の冷え渡ることき恐ろしきある者を感じぬ、貴嬢^{きみ}はただこの一人ただ自殺を謀^{はか}りしとのみ

たもうか、げに二郎と十蔵とは自殺を謀りしなるべきか。あらず、いかで自殺なる二字をもつてこの二人の怪しき拳動の秘密を解き得べきぞ、貴嬢がいわゆる人とは自ら生きんことを計り自ら死なんことを謀る動物なるべし、この二つの一つを出でざる動物なるべし。間もなく振動は全くやみぬ。われら急に内に入りて二人を求めしに、二郎は元の席にあり、十蔵はそのそばの椅子に座し、二郎が眼は鋭く光りて顔色は死人かと思わるばかり蒼白く、十蔵は怪しげなる微笑を口元に帶びてわれらを迎へぬ。あまりの事に人々出す言葉を知らざりき。俱楽部員は二郎の安全を祝してみな散じゆき、事務室に居残りしは幹事後藤のみとなりぬ。十蔵は受付の卓に倚りて煙草を吹かし、そのままわがこの夜俱楽部に来し時と変わらず見えたり、ただ口元なる怪しき微笑のみ消えざるぞあやしき。

余は二郎とともに俱楽部を出でぬ。

一天晴れ渡りて黒澄みたる大空の星の数も算まるるばかりなりき。天土はかく静かなれど地上の騒ぎは未だやまず、五味坂なる派出所の前は人山を築けり。余は家のこと母のこと心にかかるべ、二郎とは明朝を期して別れぬ。

家には事なかりき。しばし母上と二郎が幸なき事ども語り合いしが母上、恋ほどはかなきものはあらじと顔そむけたもうをわれ、あらず女ほど頼み難きはなしと真顔にて言いか

えしぬ。こは世にありがちの押し問答なれどわれら母子の間にかかる類の事の言葉にのぼりしは例なきことなりける。されど母上はなお貴嬢が情けの変わりゆきし順序をわれに聞いたまいたれど、われいかでこの深き秘密を語りつくし得ん、ただ浅き知恵、弱き意志、順なるようにてかえつて主我の念強きは女の性なるがごとしとのみ答えぬ。げにわれは思う、女もし恋の光をその顔に受けて微笑む時は花のごとく輝く天津乙女とも見ゆれど、かの恋の光をその背にして逃げ惑うさまは世にこれほど醜きものあらじと、貴嬢はいかが思いたもうや。

母上との物語をおえて二階なるわが室にかえり、そのまま身を椅子に投げ、両手もてわが顔をおおいぬ。この時こころの疲れ、身の疲れを一時に覚えて底なき穴に落ちゆく心地し、しばしは何事をも忘れたり。夢現の境を漂うて夜のふくるをも知らざりしが、ふと心づきて急に床に入りたれど今は心さえてたやすくは眠るあたわず、明けがた近くなりてしばしまどろみぬと思うや、目さめし時は東の窓に映る日影珍しく麗かなり、階下にては母上の声す、続いて聞こゆる声はまさしく二郎が叔母なり、朝とく来たりて何事の相談ぞと耳そばだつれど叔母の日ごろの快活なるに似ず今朝は母もろともしめやかに物語して笑い声さえ雜まじえざるは、いぶかしさに堪たまえず、身を起こして衣着かえんとする時階段を上

り来る音してやがて頭さしいだせしはわが妹なり、宮本の叔母様來たりたまいぬ早く下りたまえと言い捨ててそのまま階下にゆけり。

朝の事をおわるや急ぎて母上の室を入れば、母上と叔母とは火鉢を中にして対したまい、叔母はわが顔を見て物をものたまい得ず、ハンケチにて眼まなこふきふき一通の手紙を渡したまえり。これ二郎が手紙なり。

文は短けれど読みおわりて繰り返す時わが手振るい涙たばしり落ちぬ、今貴嬢きみにこの文ふみを写して送らん要あらず、ただ二郎は今朝夜明けぬ先に品川しながわなる船に乗り込みて直ちに出帆せりといわば足りなん。この身にはもはや要なき品なれば君がもとに届けぬ、君いかようにもなしたまえと書き添えて貴嬢きみの写真一枚はさみあり、こは貴嬢きみがこの正月五日御地より送りたまいし物の由。さてわれにも要なき品なれば貴嬢きみに送り返すべきなれど思つ節あればしばしわが手もとに秘め置く事ことわりいたしぬ。無益とは知りつつも、車を驅りて品川にゆき二郎が船をもとめたれど見当たらぬも理なり、問屋といやの者に聞けば第二号南洋丸は今朝四時に出帆せりとの事なれば。

ああ哀れなる二郎、われらまたいつ再びあうべきぞ。貴嬢きみはわれもはやこの一通にて厭あ

大空隈なく晴れ都の空は煤煙たなびき、沖には真帆片帆白く、房総の陸地鮮やかに見ゆ、射す日影、そよぐ潮風、げに春ゆきて夏来たりぬ、樂しかるべき夏來たりぬ、ただわかれらの春の永久に逝きしをいかにせん——

下

時は果たして來たりぬ、ただ貴嬢もわれも二郎もかかる時かかるところで三人相あうべしとは想いもよらず。

時は果たして來たりぬ、一年と二月は仇に過ぎざりき、ただ貴嬢にはあまり早く來たり、われには遅く來たれり、貴嬢は永久に來たらざるを希い、われは一日も早かれとまちぬ、いずれにもせよ余がこの手紙認むべき時はついに來たれり。

夏の玉章一通、年の暮れの玉章一通、確かに届きぬ。われこれに答えざりしは今の時のついに來たりて、われ進みて文まいらすべきことあるをかねて期しいたればにて深き故あるにあらず。今こそ答えまいらすべし、ただ一言。弁解の言葉連ねたもうな、二郎ともわれとても貴嬢が弁解の言葉きて何の用にかせん。二郎が深き悲しみは貴嬢がしきり

に言い立てたもう理由のいかんによらで、貴嬢が心にたたえたまいし愛の泉の涸れし事実の故のみ。この事実は人知れず天が下にて行なわれし厳がなる事実なり。

いかなる言葉もてもこれを言い消すことあたわず、大空の星の隕ちたるがごとし、二郎はその理由のいかんを見ず、ただ光の失せぬるを悲しむ。げにこの悲しみや深し。

友の交わりを続けてよとの御意、承りぬ。これより後なお真の友義というものわれらが中に絶えずば交わりは勉めずとも深かるべし、ただわが言うべきを言わしめたまえ、貴嬢のなすべきことは弁解を力むことにはあらで、諸手を胸に加え厳かに省みたもうことなり、静かにおのが心を吟味したもう事なり、今われ實にかの人を愛するや否やと。おのれの心の変わりゆきし跡を見たもうてあきれたもうとも笑いたもうとも泣きたもうとも、それは貴嬢が自由なり、されどあきれるも笑うも泣くもみな貴嬢が品性によりてのことなれば、あながち貴嬢が自由ともいい難し。

さて時はついに来たりぬ、いざわが文に入らん。

午後四時五十五分発横浜行きの列車にわれら二人が駆け込みし時は車長のパイプすでに響きし後なることは貴嬢の知りたもうところのごとし。二郎まず入りてわれこれに続きぬ、貴嬢の姿わが目に入りし時はすでに遅かりき、われら乗りかうるひまもなく汽車は進行を

始めたり。

貴嬢の目と二郎が目と空にあいし時のさまをわれいつまでか忘るべき、貴嬢は微かにア
と呼びたもうや真蒼になりたまいぬ、弾力強き心の二郎はずかずかと進みて貴嬢が正面の
座に身を投げたれど、まさしく貴嬢を見るあたわず両の掌もて顔をおおいたるを貴嬢が同
伴者の年若き君はいかに見たまいつらん。ただ静かに貴嬢を顧みたまいて貴嬢の顔色の変
われるに心づき、いかにしたまいし心地悪しくやおわすると甘ゆるよう問いたまいたる、
その時もしわが顔にあざけりの色の浮かびたりせば恕したまえ、二郎が耳にはこの声いか
に響きつらん、ただかれがその掌を静かに膝の上に置きて貴嬢が伴の方をきつと見たる、
その時のかれが眼より怪しき光の閃きしを貴嬢はよくも得見たまわざりしと覚ゆ。
貴嬢がわざかに頭をあげて、いなとかの君の問いに答えたまいたる、その声は墓のかな

たより亡者や吹き込みし。

よき物まいらせんとてかの君手さげの内を探りたましいが、こはいかに宝丹を入れ置
きぬと覚えしにと当惑のさまを、貴嬢は見たまいて、いなさまでに候わづとしいて取り繕
わんとなしたもうがおかしく、その時もしわが顔に卑下の色の動きたりせば恕したまえ。
われ二郎に向かいて、御身は宝丹持ちたもうならずやと問えば、二郎、打ち惑いたるさ

まにてわざかに、しかりと答う。かの君の肝きも太きことよ、直ちに二郎に向かつて、少し賜わざやと求めたもう。貴嬢がこの時の狼ろうばい狽さまこそおかしけれ、君よさまでには候わず宝丹には及ばずと訴うるようになたまいし声はしわがれて呼吸いきするも苦しげにおわしぬ。二郎やむを得ず宝丹取りだして、われに渡しければわれ直ちに薬を掬すくいて貴嬢が前に差しいだしぬ、この時貴嬢が眼まなこうるみてわが顔を打ち守りたまいたる、ああ刻むかき君かなとのたまいしようにわれは覚えぬ。

たやすく貴嬢たなごころが掌ていだしたまわぬを見てかの君、早く受けたまわづやと諭すさとように物言いたもうは貴嬢きみが親しき親族みうちの君にてもおわすかと二郎かの時は思いしなるべし、ただわれ、宇都宮時雄の君とはこの人のことよと一目にて看破みりたれば、貴嬢きみに向かつてかかる物の言いざましたもうを少しも怪しまざりき。貴嬢きみが掌に宝丹移せし時、貴嬢きみは再びわが顔を打ち守りたまひぬ、うるみたる貴嬢の目の中には、むしろ一匙さじの毒薬たまえ刻むか君とのたもう心鮮あざやかに読まれぬ。二郎はかの方に顔を負け、何も知りたまわぬかの君は、ただ一口に飲みたまえと命ずるように言いたもう、そのさまは、何をかの君かく誇りたもうぞと問わまほしゆうわが思いしほどなりき。貴嬢きみが眼を閉じて掌を口に当て、わざかに仰ぎたまいし宝丹はげに魂たまに沁しつみ體とおに透とおりて毒薬の力よりも深く貴嬢の命を刺しつらん。さ

れどかの君は大口開きて笑いたまい、宝丹飲むがさまでつらきかと宣いつつわれらを見てまた大口に笑いたもう。げに平壌攻落せし將軍もかくまでには傲りたる色を見せざりし。

二郎が苦笑いしてこの將軍の大笑に応え奉りしさまぞおかしかりける。將軍の御齡は三十を一つも越えたもうか、二郎に比べれば四つばかりの兄上と見奉りぬ。神戸なる某商館の立者とはかねてひそかに聞き込みいたれど、かくまでにドル臭き方とは思わざりし。ドル臭しとは黄金の力何事ともなし得るものぞと堅く信じ、みやびたる心は少しもなくて、学者、宗教家、文学者、政治家の類を一笑し倒さんと意氣込む人の息氣をいう、ドルの文字はまたアメリカ帰りの紳士ちよう意をも含めり。詳しき説明は宇都宮時雄の君に請いたもうぞ手近なる。

いづこまで越したもうやとのわが問いは貴嬢きみを苦しめしだけまたかの君の笑壺えつぼに入りたるがごとし。かの君、大磯おおいそに一泊して明日は鎌倉まで引っ返しかこにて両三日遊びたき願いに候えど——。われ、そは御樂おんしみの事なるべし、大磯鎌倉は始めてのお越しや。かの君さりげなく、妹いもとには始めての遊びになん。ああこの時、わが目と二郎の目とは電いなすまのごとく貴嬢が目を射たり、蒼あおざめし貴嬢が顔はたちまち火のごとく赤く変わり、いそ

ぎハンケチもておおいたまいし後はしばしわれらの言葉も絶えつ。

貴嬢がかかるけだか気高き兄君をもちたもうことはわれらまことに知らざりき、まして貴嬢が鎌倉の辺に遊びたもうは始めての由を聞き、われらあきれてしまはしは物も得言わず眼をみはりて貴嬢を打ち守りたる、こは理あることと貴嬢もうなずきたまわん、かくにわかに顔色を変えたもうは限りなき恥を感じたまいしこととわれらは見たり。貴嬢きみはよも鎌倉にて初めて宮本二郎にあいたまいたる、そのころの本末もとすえを忘れたまわざるべければ。

鎌倉ちよう二字は二郎が旧歎の夢を呼び起こしけん、夢みるごときまなざし遠く窓外の白雲はくうんをながめてありしが静かに眼を閉じて手を組み、膝ひざを重ねたり。

げに横浜までの五十分は貴嬢きみがためにも二郎がためにもこの上なき苦惱なりき、二郎には旧歎かなみの哀しみ、貴嬢には現場の苦しみ、しかして二人等しく限りなきの恥に打たれたり。ただ貴嬢きみの恥は二郎に対する恥、二郎の恥は自己おのれに対する恥、これぞ男と女の相違ならぬ。

汽車横浜に着きてわれら立ちあがりし時、かの君も立ちあがりて厚く礼のべたもう、その時貴嬢きみもまたわざかに顔なるハンケチはずを外して口口よりたもうや直ちにまた身を座に投げハンケチを顔に当てたまいぬ。その手のいたくふるえるさまわが目にも知れければ、かの君顧みたまいて始めて怪しと思う色を眼まなの中に示したまえり。

乗る客、下りる客の雜踏の間をわれら大股おおまたに歩みて立ち去り、停車場より波止場まで、
波止場より南洋丸まで二人一言ひとことも交えざりき。

船上のぼに上りしころは日ようやく暮れて東の空には月いで、わが影淡く甲板に落ちたり。卓あり、粗末なる椅子いす二個を備え、主と客とをまり、玻璃製はりの水瓶びんとコップとは雪白なる被布カバの上に置かる。二郎は手早くコップに水を注つぎて一口に飲み干し、身を椅子に投ぐるや、貞二いとうと叫びぬ。

声高く応いらえしてここに駆け来る男は、色黒く骨たくましき若者なり、二郎は微笑みつ、早く早くと優しく促せり。若者はただいまと答え身を回らしてかなたに去りぬ。二郎、空腹ならずや。われ、物言うも苦し。二人は相見て笑いぬ、二郎が煙草シガには火うつされたり。

今宵こよは月の光を杯さかづきくに酌みて快く飲まん、思うことを語り尽くして声高く笑いたし、と二郎は心地ここちよげに東の空を仰ぎぬ。われ、こしかた行く末を語らば二夜ふたよを重ぬとも尽きざらん、行く末は神知りたもう、ただ昨日きのうを今日の物語となすべし、泣くも笑うもたれをはばからんや。

二郎、早く早く貞二いとう、と叫びてまた快く笑い、こしかたは夢のみ、夢を語るに泣くは愚かなり。われ、ともかくも早く飲み早く食わば泣くのほかあらず。

間もなく貞二が運ぶ酒肴整いければ、われまず二郎がために杯を挙げてその健康を祝し、二郎次にわがために杯を挙げかくて二人ひとしく高く杯を月光にかざしてわが俱樂部の万歳を祝しぬ。

二郎はげに泣かざるなり、貴嬢が上を語りいで、こし方かたの事に及べど、かれはただ夢みるごときまなざしにて杯の底をながめ、哀れなる少女よとかこつのみ。ああ時よ！。時の力は不思議なるかな、一年余りの月日は二郎が燃ゆることき恋を変えて一片の憐みとなしぬ。かれが沸騰せし心の海、今は春の霞かすめる波平らかに貴嬢はただ愛らしき、あわれなる少女富子の姿となりてこれに映れるのみ。されどかれも年若き男なり、時にはわが語る言葉の端々に喚びさまされて旧歎の哀情に堪えやらず、貴嬢がこの姿をかき消すこともあれど、要するに哀れの少女よとかこつ言葉は地震の夜の二郎にはあらず、燃ゆる恋はいつしか静かなる憐みと変わりり。されど貴嬢きみ、こはわが期こしたる変化なるのみ。

今日汽車の内なる彼女の苦惱は見るに忍びざりき、かく書いて二郎は眉をひそめ、杯をわれにすすめぬ。泡立つ杯は月の光に凝りて琥珀の珠こはくたまのようなり。二郎もわれもすでに耳熱し気昂れり。月はさやかに照りて海も陸もおぼろにかすみ、ここかしこの舷燈げんとうは星にも似たり。

げに見るに忍びざりき、されど彼女自ら招く報酬なるをいかにせん、わがこの言葉は二郎のよろこぶところにあらず。

二郎、君は報酬むくいと言うや、何の報酬ぞ。

われ、人の愛を盗みし報酬なり。

二郎はしばし黙して月を仰ぎつ、前なる杯さかづきを挙げ光にかざせば珠のごとき色かれが額に落ちぬ。しかば愛を盗まれし者の報酬むくいは何ぞと言いつつ飲み干せり。われ、哀しき心にその美酒うまざけの浸み渡る心地ならぬ。二郎は歎然として笑いた月を仰ぎぬ。

この時檣のかなたに立つ人あり、月を背にして立てばその顔は知り難し。突然こなたに向きて、しかば問いまいらせん、愛の盜人もし何の苦惱くるしみをも自ら覚えで浮世を歌い暮らさばいかに、これも何かの報酬あるべきか。

二郎は高く笑いてわが顔をながめ、わが答えをまつらんごとし。問い合わせる主はわれ聞き覚えある声とは知れど思ひいです。ほぼしら檣の方に身を突きいだして、御問おんいに答えまいらすはやすし、こなたに進みてまず杯を受けたまえといえ巴、二郎は、来たれ来たれと手招きせり。檣の陰より現われしは一個の大男なり。

見忘れたもうなど言いもおわらず卓の横に立つは片目の十歳ならんとは。二郎は椅子を

離れ手を拍^うつて笑いぬ。

いかで忘るべきと杯を十蔵の前に置き、飲み干してわれに与えよ再会を祝せん。

十蔵はわれを寿^{ことぶ}きて杯を飲み干し、片目一人、この船に加わりいることをかねて知りたまいしやと問う。われ、なんじの影地震の夜^よの間に消え失せぬと聞き、かの時の挙動など思い合わして大方は推^{すい}いたれどかく相見ては今さらのようにうれし。

かつて酒量少なく言葉少なかりし十蔵は海と空との世界に呼吸する一年余りにてよく飲みよく語り高く笑い拳もて卓をたたき鼻歌うたいつつ足尖^{つまさき}もて拍子取る漢子^{おとこ}と変わりぬ。かれが貴嬢をば盗み去つてこの船に連れ来たらばやと叫びし時は二郎もわれも耳をふさぎぬ。かれの説によれば、貴嬢はもと心順なる少女なれば境によりてその情を動かすがゆえに南洋丸に乗せて一年が間、浮世の風より救い出さば必ず御顔^{おん}にふさわしき天津乙女となりたもうとの事なり、われはたやすくこれを信ずるあたわざるのみ。

十蔵はその片目を細くして小歌うたいつ、たちまち卓を打ちて、君よかの問い合わせはいかにしたまいしとその片目をみはりぬ。二郎はいたく酔^えい、椅子の背^{うしろ}に腕を掛けて夢^{ゆめう}現^{つつ}の境にありしが、急に頭をあげて、さなりさなりと言い、再び眼^{まなこ}を閉じ頭を垂れたり。もし君が言わるるごとくば世には報酬^{むくい}なくして人の愛を盗みおおせし男女はなはだ多し

と、十蔵はいきまきぬ。

われ、なんじの妻の「」ときをいえるにや。

あらず、あらず、彼女は犬にかまれて亡せぬ、恐ろしき報酬を得たりと答えて十蔵は哄然と笑うその笑声は街多き陸のものにあらず。

二郎は頭あげて、しからばかのふびんなる少女もついには犬にかかるべきか。

犬や犬や浮世の街にさすらうものの犬ならざるいくばくぞ、かみつかまれつその日と夜を送り、そのほゆる声騒がしく、とてもわれらの住み得べきにあらず、船を家となし風と波とに命を託す、安ければ高い高ければ売り、酒あれば飲み、大声あげて歌うもわがために耳傾くるは大空の星のみ——月さゆる夜は風清し、はてなき海に帆を揚げて——ああ君はこの歌を知りたもうや——月さゆる夜は風清し——右を見るも左を見るも島影一つ見えぬ大海原に帆を揚げ風斜めに吹けば船軽く傾き月さえにさえて波は黄金を碎く、この時舷に立ちてこの歌をうたうわが情を君知りたもうや、げに陸を卑しみ海を懼れぬものならではいかでこのこころを知らんや、ああされど君は知りたもう——

十蔵はその杯を干してわが前に置き、——されど君は知りたもうと繰り返せり。

この時二郎は静かに頭をあげて月を仰ぎしが急に身を起してかなたこなたと歩みつつ、

ああ心地よき夜やと言ひ、皿よりパインアップルの太き一片を取りて口に入れつ、われを顧みて、なんじその杯を干してわれに与えずや。かれはわが杯を受けて心地よげに飲み干し、大空を仰ぎて、愛盜まれし者の受くべき報酬はげに幸いなりき、十蔵なんじもその一人ならずやと杯を十蔵が前に置きぬ。十蔵は半ば眠りて応えなし。片目を微かに開きしもまた閉じたり。

夜はいよいよふけ月はますますさえ、市街の物音もやや静まりぬ。二郎は欄に倚りわれは帆綱に腰かけしまま深き思いに沈みしばしは言葉なかりき。なんじはまことに幸いなる報酬を得たりと思うや二郎、とわれは二郎の顔を仰ぎて問い合わせ。

二郎は目を細くして月を仰ぎつ、うれしき報酬とは思わず、されどかの少女をふびんなりと想えば限りなき哀れを覚え、われに負きし拳動など忘れて、ただ懐かしさに堪えず、げにふびんなるはかの少女なり。

二郎しからばなんじにまいらすべき一品ありと、かねて用意せる貴嬢きみが写真のポツケツトより取り出して二郎が手に渡しぬ。何心なく受け取りてかれはしばし言葉なくながめ入りぬ、月の光は冷ややかに貴嬢きみが姿を照らせり。

そはなんじが叔母に託して昨年の夏の初め、品川出帆の朝、わがもとに送りたる品なり、

今再びこれをなんじに還さん、なんじはなお手もとに置き難しと言うや、かく言いしわが言葉は短けれどその意は長し。

二郎はなお言葉なくながめ入りぬ。

げにかたじけなしと軽く戴き内衣兜に入れて目を閉じたり。

二郎がこの言葉はきわめて短くこの拳動ははなはだ単純なれど、その深き意はたやすく貴嬢の知り得ざるところなり。

なんじはげにわが友なりと二郎はわが手を堅く握りて言えり、その声はふるいぬ。われこの時二郎に向かつて、よししからばわが言うをきけ、人は到底陸の動物なり、かつなんじはわれらと共になすべき業を有すと言い放つを願わざりしにはあらねど、されど二郎ほどの男、わが言葉によりて感憤するほどの不覚をなさじ、かれ必ずかれの志あり、海を懼れず陸を懼れずなさんと欲するところをなすはこの若者なるをわれ知れば、ただしばしそのなすところに任さんのみと思いてやみぬ。

二郎はわれを導きてその船室に至り、貴嬢の写真取り出して写真掛けなるわが写真の下にはさみ、われを顧みてほほえみつ、彼女またわれらの中に帰り来たりぬといえり。この言葉は短けれどその意は長し——

この書状は例によりてかの人に託すべけれど、貴嬢きみが手に届くは必ず数日かかわの後なるべし、貴嬢きみもしかの君に示さんとなれば、そは貴嬢きみの自由なり、われには何の関りもなし。

（明治三十年十一月作）

青空文庫情報

底本：「武藏野」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年2月15日第1刷発行

1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行
2002（平成14）年4月5日第77刷発行

底本の親本：「武藏野」民友社

1901（明治34）年3月

初出：「国民之友」

1897（明治30）年11月

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2012年7月1日作成

2012年9月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://wwwaozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆様です。

おとずれ

国木田独歩

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>